

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02072

研究課題名(和文)「核家族」概念と「二核家族」概念に関する理論社会学的・知識社会学的研究

研究課題名(英文)Theoretical Studis on 'nuclear family' and 'binuclear family'

研究代表者

鈴木 健之 (Suzuki, Takeshi)

立正大学・文学部・教授

研究者番号：90310234

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究において、第一に、タルコット・パーソンズの「核家族」概念とコンスタンス・アーンズとロイ・ロジャーズの「二核家族」概念にかかわる諸著作・諸論文の精読を行った。パーソンズの「核家族主義」がアーンズとロジャーズによっていかにして相対化されていったのかを知識社会学的・理論社会学的考察をとおして明らかにすることができた。第二に、アーンズ本人と彼女の関係者へのインタビューを行った。これらのインタビューをとおして、離婚研究を専門とする社会学者アーンズ、家族問題の相談を受けるファミリーセラピストアーンズ、南カリフォルニア大学時代の教育者アーンズという三つの顔を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第一に、パーソンズの「結婚」から始まる<家族論>に対して、アーンズ＝ロジャーズの「離婚」から始まる<家族論>を対置することで、パーソンズの<家族論>に入り込むセクシズムを明るみにすることができた。また、男女の結婚・パートナーシップに限定されるアーンズ＝ロジャーズの<家族論>に入り込むヘテロセクシズムを明るみにすることができた。さらに両者の超克をめざす「クィア 家族論」の可能性を示唆することができた。第二に、アーンズの「離婚の社会学」とファミリーセラピストとしての実践が日本において離婚問題を考える際に重要な理論的かつ実践的な示唆を与えるものであることを明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：In this study, first, I conducted close readings of various works and articles related to Talcott Parsons' concept of the "nuclear family" and Constance Ahrons' and Roy Rodgers' concept of the "binuclear family". Through the theoretical sociological study, I was able to clarify how Parsons' "nuclear familism" was relativized by Ahrons and Rogers. Second, I conducted interviews with Ahrons herself and her associates. Through these interviews, I was able to identify three faces: Ahrons, a sociologist specializing in divorce research; Ahrons, a family therapist who consulted on family issues; and Ahrons, an educator during her time at the University of Southern California.

研究分野：社会学

キーワード：核家族 タルコット・パーソンズ 二核家族 より離婚 コンスタンス・アーンズ ロイ・ロジャーズ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

タルコット・パーソンズの「家族」論の理論的問題点は、セクシズム(男性中心主義)とヘテロセクシズム(異性愛主義)が議論の前提となっているという点である。パーソンズは家族における男女の役割(性別役割をパーソンズは sex role と呼んだ)をはっきり分け、リーダーとしての男性、フォロワーとしての女性という社会的役割を振り分けていた。また「男」と「女」が「結婚」して、そこから「家族」生活が始まると議論していた。男女の結婚によって家族が始まる。これを正しいとするのがパーソンズの家族論である。個人ではなく家族、そして結婚が理論前提とされることによって、結婚しないで一人にいる人(独身者、とくに女性)は差別される。また核家族の「核」がこれ以上分割できない以上、離婚してはならないという規範が強化され、離婚した家族は「欠損家族」(broken family)と呼ばれ差別される。

こうしたパーソンズの「結婚」中心主義、「核家族」中心主義に対して、「二核家族」(binuclear family)という新しい社会学的概念を提唱したのが、コンスタンス・アーンズ(Constance Ahrons)とロイ・ロジャーズ(Roy Rodgers)である。その著書『離婚家族』(Divorced family, 1987)において、アーンズとロジャーズは、80年代、結婚したカップルのうちに2組に1組が離婚するという状況を目の当たりにして、パーソンズの「核家族」にたいして、「二核家族」(binuclear family)という概念を提出し、アメリカにおける「二核家族化(離婚の増大)」について理論的かつ実証的な研究を行った。アーンズとロジャーズは「二核家族」という概念によって、パーソンズの「結婚主義」・「核家族主義」を相対化したのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アメリカにおける従来の離婚の社会学的研究を検討しながら、「よい離婚」(good divorce)のあり方を理論社会学の立場から探求することにある。第1の研究目的は、理論社会的な目的として、タルコット・パーソンズの「核家族」概念とコンスタンス・アーンズとロイ・ロジャーズの「二核家族」概念にかかわる諸著作・諸論文の精読をとおして、パーソンズの「核家族主義」がアーンズとロジャーズによっていかにして相対化されていったのかを明らかにすることにある。第2の研究目的は、知識社会的な目的として、アーンズ本人と彼女の関係者へのインタビューをとおして、離婚研究を専門とする社会学者アーンズ、家族問題の相談を受けるファミリーセラピストアーンズ、そして、南カリフォルニア大学時代の教育者アーンズ、という三つの顔を明らかにすることにある。第3の研究目的は、実践的な目的として、アーンズらが組織化した「全米ファミリーセラピスト協会」、<よい離婚>をクライアントと「コラボラティブ・プロフェッショナルズ」(Collaborative Professionals)との話し合いによって進めていく「コラボラティブ・ディヴォース」(Collaborative Divorce)、そして離婚後も良好な親子関係を築き上げていくための「キッズターン」(Kids' Turn)の日本的展開の可能性、すなわち、日本における「よい離婚」の可能性を探ることにある。

3. 研究の方法

本研究において、第1に、1980年代以降、アメリカと日本における主要な家族社会学のテキストブックと結婚と離婚と再婚に関する文献収集並びにアーカイブズの構築を行い、タルコット・パーソンズの「核家族」概念とコンスタンス・アーンズとロイ・ロジャーズの「二核家族」概念にかかわる諸著作・諸論文のテキストクリティークをとおして、第1の研究目的を達成する。第2に、アーンズ本人と彼女の関係者へのインタビューをとおして、第2の研究目的を達成する。第3に、「全米ファミリーセラピスト協会」、「インターナショナル・アカデミー・フォー・コラボラティブ・プロフェッショナルズ」、そして「キッズターン」の関係者へのインタビューをとおして、第3の目的を達成する。

4. 研究成果

本研究において、第1に、パーソンズの「核家族」概念とアーンズ・ロジャーズの「二核家族」概念にかかわる諸著作・諸論文の精読を行った。パーソンズの「核家族主義」がアーンズとロジャーズによっていかにして相対化されていったのかを知識社会的・理論社会的考察を通して明らかにすることができた。以上の研究成果は、鈴木健之の『「核家族」と「二核家族」概念再考：タルコット・パーソンズとアーンズ・ロジャーズ』(立正大学人文科学研究年報58号2021年3月)として公表した。

第2に、アーンズ本人と彼女の関係者へのインタビューを行った。これらのインタビューをとおして、離婚研究を専門とする社会学者アーンズ、家族問題の相談を受けるファミリーセラピストアーンズ、そして、南カリフォルニア大学時代の教育者アーンズ、という三つの顔を明らかにすることができた。以上の研究成果は、鈴木健之の『「よい離婚」再考：現代アメリカ社会における離婚研究』(立正大学文学部論叢145号2022年)として公表した。

第3に、1980年代以降、アメリカと日本における主要な家族社会学の教科書と結婚・離婚・再婚にかんする社会学研究書、並びに離婚調査研究にかかる資料収集を行い、離婚をめぐる社会

学的研究のアーカイブズを構築することができた。

第4に、コンスタンス・アーロンズ『よい離婚』(*The Good Divorce*, 1994)の訳稿を完成させることができた。2024年3月に刊行予定である。

第5に、コンスタンス・アーロンズ、ロイ・ロジャーズ『離婚家族』(*Divorced Family*, 1987 [日本語版 1991年])のペーパーバック版の訳稿を完成させることができた。1991年に刊行された日本語版は、ハードカバー版の翻訳であり、ペーパーバック版の出版にあたり、副題が変更され、序文が新しくなり、若干の加筆修正が行われている。上述の『よい離婚』と同様、新訳版を2024年3月に刊行予定である。

第6に、本研究プロジェクトに間接的にかかわるものとして、2013年8月にはアーロンズとロジャーズ、2014年1月、2018年7月にはアーロンズにインタビューを行ったことがきっかけで、「インターナショナル・アカデミー・フォー・コラボラティブ・プロフェッショナルズ」(IACP)と「キッズターン・サンディエゴ」をアーロンズから紹介していただいた。2017年10月には、当時のIACP会長のスーザン・エイケン(Suzan Barrie Aiken)、副会長のケイ・チャン(Kay Chan)をサンフランシスコに訪ね、インタビューを行うことができた。また、2013年8月と2018年7月には「キッズターン・サンディエゴ」を訪ね、現在所長のシンディ・グロスマン(Cindy Grossman)とその関係者にインタビューを行うことができた。本研究プロジェクトに直接かかわるものとして、2022年10月に、コンスタンス・アーロンズのもと、南カリフォルニア大学大学院博士課程で学んだグロリア・ゴンサレス＝ロペス(Gloria González-López)にインタビューを行うことができた。アーロンズもゴンサレス＝ロペスも「社会学者」と「ファミリーセラピスト」という二つの顔を持つ。アーロンズとゴンサレス＝ロペスとの出会い、そして二人へのインタビューをとおして、「アーロンズとゴンサレス＝ロペス：現代アメリカ社会におけるプロフェッションとプロフェッサー」という新しいテーマを得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鈴木健之	4. 巻 145
2. 論文標題 『よい離婚』再考 現代アメリカ社会における離婚研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立正大学文学部論叢	6. 最初と最後の頁 69-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木健之	4. 巻 58
2. 論文標題 「核家族」概念と「二核家族」概念再考：タルコット・パーソンズとアーロンズ＝ロジャーズ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立正大学人文科学研究所年報	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------